

視野を広げて見る、あるべき未来の林産業

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 富田 守泰

先行きが見通せない世の中にあつて、如何に地域で仕事に就いてもらうか。将来を担う学生が地域で未来を描けるような種探しを常にしています。私の分野である林産業について考えるとき、視野を広げると見えてくることがあります。

● 大規模化と流通の変革

その一つは大規模化と流通の変革です。林業から林産業・建築業の木材という媒体を通じた業種は、「川下までつなげることで森林の価値を地域に還元し、地域で生活が成り立つ基本であるべき」と信じ、地域の製材、工務店への技術支援や学生を送り出してきました。そのベースには、岐阜県の場合それは地域ごとの小規模な薬筆筒の引き出しがイメージとしてあり、いつでもその引き出しを開けることができました。

一方で国や県の施策による大規模工場化が合板工場から製材工場に移るにつれ木材の流れが変わり、地域の工務店の存

在意義までも変化するのではないかと危惧します。たしかに林業・林産業個々を考えれば大規模工場の誘致により木材需要が喚起され、雇用が増す。しかし出来た製品は引き出しから離れ全国流通に載ってしまい、その地域でそれ以上の価値を生まないのではないのでしょうか。産直住宅に代表される岐阜の工務店は地域の木材を売りにし、地域のブランドを背負ってきました。そこで住宅というもつ

とも高付加価値を生む商品を販売し、地域の経済を成り立たせてきました。グローバル化経済の究極が日本の、岐阜の、引き出しの末端まで浸透し地域経済をさらに追いやることにならねばいいのです。

● エネルギー問題は 無在庫問題

もう一つはエネルギー問題です。建築に地元の木材を使用することは極めて省エネであると随所で言われています。そ

れであつても人工乾燥材を利用するとなるとそうではなくなっているという現実をご存知でしょうか。秋田県で国産人工乾燥材を使用した国産住宅と同じ地域に建てた外材の輸入住宅の材料にかかるエネルギーを比較したところ、ウッドマイルズを考慮しても国産住宅の方がエネルギーを使用していたという現実はこの問題の根深さを物語っています。

この根本には近年の効率優先の経営概念が絡んでいます。かつての製材工場は随所に在庫をかかえていました。それは経済が厳しくなる中で無駄なものとの烙印が押しつけられ減してゆきました。それを補完するのが人工乾燥でもあつたのです。そしてそれがエネルギー多用のシステムとして作られていったのです。

● 乾燥の変革からみえる 未来の林産業

人工乾燥に対して従来から天然乾燥があるわけですが、なぜ構造材の天然

乾燥が普及しなかったか？先の無在庫問題以外の最も大きなものにリスクがあります。材質の低下つまり割れによる材価の低下が懸念されるということです。従来は背割りを入れていましたが、施工の合理化が進み無背割りが中心となった現在、割れに対するリスクは木材を商品として流通に載せる製材業にとつての大きな懸念材料であるということです。しかし現在の高温乾燥はそのスケジュールの中にドラインゲットという処理で割れを防止しています。その処理のみ実施して天然乾燥する試みもされています。この方法は材色もよくなり、内部割れの問題もなく、材面割れのリスクはほとんど回避できます。乾燥は部屋全体の昇温にもつともエネルギーを消費することから、出入口を分けた連続サイクル型乾燥機（ドラングセット処理機）とバイオマスボイラーによりエネルギー問題を解決できます。

このような技術革新を踏まえた上で、消費税駆け込み需要の材価高騰を契機として在庫に対する考え方を再考すべきではないでしょうか。工具メーカーで有名なドイツのポッシュ社に対し日本のマキタが現地の大量在庫攻勢で順調に売り上げを伸ばしているとのこと。在庫で地元工務店の信頼を得、武器にすることを考えるべき時。それが第一の問題、大規模化と流通の変革に対する中小林産業の対策にも繋がるのです。